ぼ平坦な面と成る。北半部の段差は約0.1mあり、これは10Dトレンチ南半部に於いて見られたものと同様であり、後世に削平された影響によるものと考えられる。とくに北端部と南西端が激しい。東西間の高さを見ると、ごく僅かではあるが西側が高くなる傾向にある。

遺構としてはピット、土坑、溝を確認した。遺構については、ピットが10Dトレンチと比較すると非常に少ないが、土坑の多いのが目立つ。溝に関してもその数が少ないのが特徴である。溝においては、調査区の南半部に存在する溝の中で、大きな土坑または落ち込みとすべきかどうか不明瞭な遺構がある。

ピット

ピットは調査区中央部の土坑周辺や、南半部の溝周辺で散在的に検出された。

土坑周辺のピットは、平面形が主に円形を成し、中には楕円形を呈するものが存在する。大きさは0.1m未満のものから、0.5mのピットが多い。0.3mのピットが主流である。0.5mのピットはP34である。土坑1・4やP37付近のピットを見ると幾つか並びそうである。P28・29・32、P23~27である。前者は主軸を東北東－西南西方向におき、後者の主軸も同様な方向においている。なお柱根の痕跡は確認できなかった。

南半部のピットは、平面形が円形と楕円形を成すものがある。大きさは0.1m未満から0.7mを測る。大きいピットは、P12・16である。P12・16は、平面がやや不整な方形を呈する。P12は、断面形がややすり鉢状を呈する。ピットからは径0.12cmの柱根痕跡を確認した。掘り方

写真41　11Dトレンチ全景（北から）

写真42　P12土層断面（南から）

写真43　溝２土層断面、P10全景（北から）

の埋土は砂質土である。深さは0.15mを測る。他に柱根の痕跡を確認したものは、P10がある。P10は掘り方の径が0.2mを測り、柱根径は0.07mを測る。

並ぶピットとしてはP７・８・10・11と、P２・３・４とP４・５・６である。P７～11は、P８・10・11の間が約1.1mあり、全長2.65mを測る。P２～４は全長が2.4mを測る。P４～６は、全長が3.4mを測る。他にはP12の北側に位置するP110・13・15である。ピット間の距離は0.55m、0.95mで、全長1.5mを測る。

土坑

土坑は、調査区の中央部から北半部で検出した。とくに北半部の一段下がった箇所で見られる。土坑とピットの区分において、P37の様に不明瞭なものがある。P37はこの項で記述しておくことにし、土坑11として併記する。

北半部の土坑についてみると、幾つか並んでいるものがある。①土坑６・10・４・P37（土坑11）・土坑１で、②土坑５・４・３・８である。これらの土坑を主軸方向で見ると以下の様になる。A．土坑７・６・10・４・１が同一方向で、土坑１を除いて長辺がほぼ東西方向におく。土坑１は短辺が東西方向においている。B．土坑５・３・８は長辺が東北東－西南西方向におく。

土坑間の距離（土坑の中心）は、土坑６・10・４が約２mで、土坑４・３・８は約2.5mである。他では土坑６・７が約５mを、土坑７・８が約5.5mを、土坑１・８が約５mを測る。

平面形は、土坑８を除いて隅丸方形を呈する。大きさは（最大長）、土坑10・４・３がほぼ同じで1.2～1.4mを測る。また土坑６・７も同じ大きさで、約1.7mを測る。深さは①の一群が0.2m前後である。土坑３・７・８は0.32～0.34mを測り、P37（土坑11）・土坑５・２では0.11～0.17mである。

土坑１はP37（土坑11）に位置する。土坑の上部は後世に削平されて、下部が残存している。長辺はほぼ南北方向におく。調査中、旧耕作土・床土を除去すると、本遺構とその周辺の土が黒色で炭化物の多い事に気が付いた。丹念に精査を行うと、土坑に炭化物の塊と赤変した土が認め

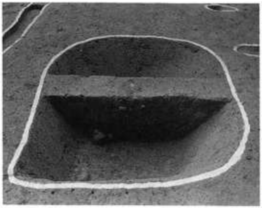


写真44　土坑３土層断面（東から）

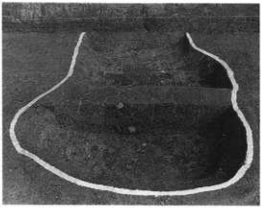


写真45　土坑６土層断面（西から）

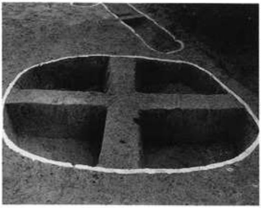


写真46　土坑７土層断面（北から）

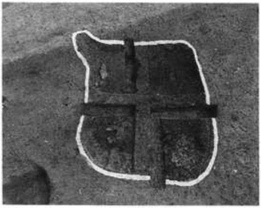


写真47　土坑１全景（北から）

られた。

平面形は全体的に不整な隅丸方形を呈し、南東コーナー部が少し突出する。現状の大きさは肩部で1.1×0.9mを測り、深さは0.12mを測る。段差のある箇所から測ると約0.2mあり、本来はそれより以上の深さがあったものと推測される。底部は東側と南側が平坦で、西側が少し下がる。底部面から壁面に至る箇所は、丸味を有している。なお突出部は、0.15×0.18mを測る。

埋土は大きく２層に分かれる。上層より10ＹＲ４／２～7.5ＹＲ５／２灰黄褐色～灰褐色粘シルト（炭化物多し、焼土塊混じる）、10ＹＲ２／１～1.7／１黒色粘シルト（炭の堆積）である。更に、南側の壁面付近には赤変した焼土が確認され、壁面にも赤く痕跡が残る。壁面の赤変は、突出部でも認められた。出土遺物としては、炭化物や焼土塊のほかに、土師器が出土している（図80－３・４・５・６）。土師器は東側の平坦部で検出した。土師器は数個体分認められ、いずれも底部が欠損しているので、器種については不明瞭であるが、皿ないしは杯の類と推測される。埋土については調査中から特に注意し、ふるいにかけて洗浄したが、炭以外の遺物は全く認められな

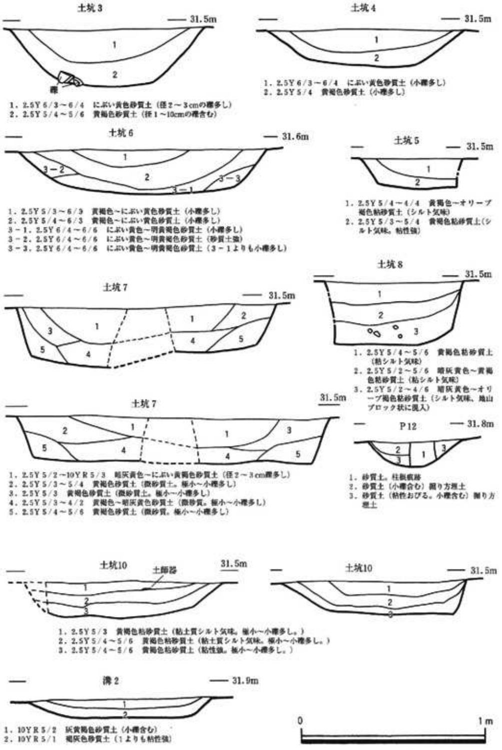


図27　11Dトレンチピット、土坑、溝断面図

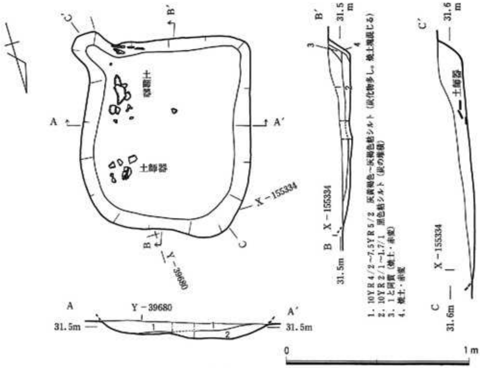


図28　土坑１平面・断面図

写真48　土坑１土層断面（西から）

写真49　土坑１完掘状況（北から）

かった。

P37（土坑11）は、土坑１の東側に約１m離れて（土坑の中心から）位置する。主軸は本遺構のみが異なり、長辺が北西－南東方向におき、平面形は隅丸長方形を呈する。大きさは0.7×0.55mを測り、他の土坑に比して小さく、深さも0.13mと浅いものである。遺物は出土していない。

土坑３は土坑４と土坑８と並び、丁度その中間に位置する。平面形は、不整な隅丸方形を呈する。断面形は、すり鉢状を呈する。大きさは、1.3×1.05mを測る。深さは、約0.3mを測る。埋

土は２層に分けられ、上層より2.5Ｙ６／２～６／４にぶい黄色砂質土（径0.02～0.03mの礫多し)、2.5Ｙ５／４～５／６黄褐色砂質土（径0.01～0.1mの礫含む）で、埋土中に礫を非常に多く含む。遺物としては、土器細片が出土している。

土坑４は、土坑５に近接して位置する。平面形は隅丸方形である。断面形は、土坑３と同様にすり鉢状を呈する。底部は南側がやや高く、緩やかな傾斜面を成す。埋土は２層に分かれる。上層より2.5Ｙ６／３～６／４にぶい黄色砂質土、2.5Ｙ５／４黄褐色砂質土で、両者共に小礫を多く含んでいる。大きさは1.4×1.1mで、深さは約0.17～0.2mである。

土坑５は、土坑４の北側に位置し、大半が調査区外に延びる。大きさは0.5以上×0.85mで、深さは0.17mである。

土坑６は土坑10の北側に隣接し、調査区外に延びる。平面形は不整な隅丸長方形を呈する。本土坑は、２つの土坑が重複したとも考えられるが、断面の観察では確認できなかった。大きさは1.8以上×1.4mである。埋土は上層より、2.5Ｙ５／３～６／３黄褐色～にぶい黄色砂質土、2.5Ｙ５／４～６／３黄褐色～にぶい黄色砂質土、2.5Ｙ６／４～６／６にぶい明黄褐色砂質土で、小礫を多く含む。３層目は礫が非常に多い。遺物は須恵質の土器片が出土している。

土坑７は、長辺に膨らみを有する隅丸方形である。大きさは1.7×1.4mである。底部では北側が平坦面で、南側に0.05mほど下がる。埋土は、上層より2.5Ｙ５／２～10ＹＲ５／３暗灰黄色～にぶい黄褐色砂質土、2.5Ｙ５／４～４／２黄褐色～暗灰黄色砂質土で、小礫を多く含む。特に下層は、微砂質土である。遺物としては、土師質の土器片が出土している。

土坑８は、土坑３の南側に位置し、調査区外に延びる。大きさは0.8以上×1.1mである。深さは0.34mを測る。平面形は、現状より楕円形を呈するものと推測される。埋土は３層に分かれるが、全体的にシルト気味の粘砂質土である。下層では、地山の土がブロック状に混入している。

土坑10は土坑６と土坑４の間に位置する。主軸はこれらと同じくする。大きさは先の土坑と比較してやや小さいが、深さはほぼ同じである。埋土は３層に分けられるが、総て黄褐色砂質土である。遺物は上層で土師器の細片が出土している。

溝

溝は先述したように、耕作の痕跡の溝とそれ以外の溝に分けられる。前者は幅0.1～0.5m、深さは0.02～0.2mを測る。主軸は大体東西方向のものと、南北方向のものに分けられる。特に土坑周辺で多く見られる。東西方向の溝では、西側から東側に向かって鋤かれた事が確認された。

後者の溝では、溝１・５・17・18が問題となる。溝18は、埋土が溝１～17と同一であったために一連の遺構と考えた。これらの遺構の埋土は、10ＹＲ５／２～2.5Ｙ５／１灰黄褐色砂質土（粘性強)、10ＹＲ５／６～５／８黄褐色粘砂質土（粘土質シルト）で、溝２よりも粘土質である。

溝２は、ほぼ南北に走行しており、溝の幅が0.7～１m、深さが0.04～0.1mを測る。埋土は上下層ともに砂質土である。遺物では土師器甕口縁部の破片が出土している。

2．E地区

（1）8Eトレンチ

本遺構面は調査区の北半部、特に北端部では後世による削平が著しく、撹乱盛土を除去すると直ぐに遺構面が検出される。旧耕作土や床土は削平され、床土が部分的に残るのみである。北半部の中央から以南にかけては、旧耕作土や床土が遺構面の上を覆っている為に、遺構の残存状況も良好である。X－159400ラインで大きく段差が付き、北側が低く成る。高低差は約0.2～0.3mを測る。また南半部中央のX－159420ラインにおいても段差が在り、南側が高く成る。高低差は0.25mを測る。遺構面の標高は、北半部の北端でT．P．＋31.62m、南端（段の低い箇所）でT．P．＋31.76mを測る。南半部の北端（段の高い箇所）ではT．P．＋32.01mを、中央の段の高い箇所ではT．P．＋32.33mを、南端ではT．P．＋32.38mを測る。調査区の北端と南端では、標高差が0.76mとなる。東西間の標高を比較すると、北半部では西側がやや高く、南半部では東側がやや高く成る。

遺構としては、ピット、井戸、土坑、溝、畦畔状遺構等を確認した。遺構の検出状況を外観すると、北半と中央部に多くのピットが存在し、とくに中央部で集中する。集中する箇所は、溝22と溝16の間である。

このようにピットが多く存在する所には、井戸と土坑が幾つか見受けられる（ピットの時期と井戸、土坑の時期が同じであるかどうかは、出土遺物の細かい分析が必要であり、後日の整理報告書に委ねたい。ここでは、平面的に外観した場合のことである）。また溝についてもピット

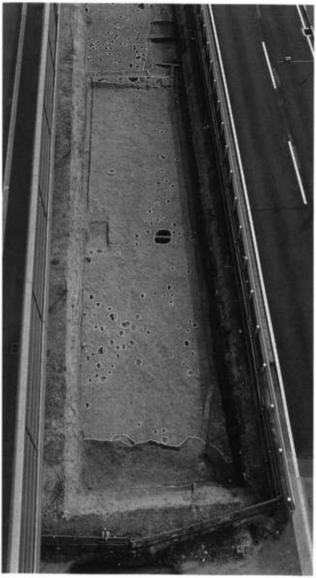


写真50　8Eトレンチ北半部全景（北から）

が多く存在する箇所に、位置するようである。

ピット

ピットの立地は、先記したように、ピットの密集度によって北半部と南半部に大きく分けられる。北半部では、北端の溝14と溝22の北側で段差の付く箇所の間に、ピットを多く検出した。ピットの中には並ぶものも幾つかあり、また柱根の痕跡を確認したものも幾つかある。ピット列はその主軸方向を①北東－南西方向におくもの、②北西－南東方向におくもの、③北北西－南南東方向におくものと、３種に分類されるようである。また平面形によっても分けられ、円形または不整な円形のものと、隅丸方形もしくは不整な隅丸方形の、２種である。大きさでは、0.1～0.5mを測る。

写真51　中央部・南半部全景（南から）

主軸方向について見れば代表的なものを挙げると、②ではＰ194・186・184、Ｐ199・190、Ｐ193・185がある。

Ｐ194・186・184は、全長が約３ｍを測り、ピット間の距離はＰ194・186が1.7ｍを、Ｐ186・184は1.3ｍを測る。いずれも柱根の痕跡を確認した。埋土は柱根痕跡・掘り方ともに小・中礫を含む粘砂質土である。Ｐ184は径0.32ｍ、深さ0.2ｍを測り、他に比してやや大きく、柱根痕跡も0.16ｍと大きいものである。

Ｐ193・185は、先のＰ194・186・184と主軸を同じくする。ピットの平面形は不整な円形を成す。ピット間の距離は1.9ｍを測る。Ｐ193は径0.45ｍとＰ187・201と同様に大きい。柱根の痕跡の大きさは、0.9～1.3ｍを測る。Ｐ193・185を更に軸線を延長すると、Ｐ214・222と並ぶ。Ｐ193とＰ214の距離は2.1ｍを測り、Ｐ185とも2.15ｍとほぼ同じである。

Ｐ199・190は、ピットの径が0.2～0.3ｍを測る。ピット間の距離は1.7ｍを測る。いずれも柱根の痕跡が残り、径が0.1～0.3ｍを測る。埋土は柱根痕跡、掘り方共に小礫を含む粘砂質土である。

写真52　８Ｅトレンチ土層断面（東から）

写真53　８Ｅトレンチ土層断面（東から）

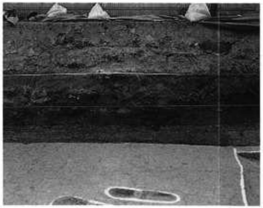


写真54　９Ｅトレンチ土層断面（東から）

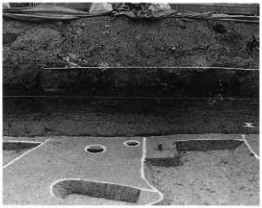


写真55　９Ｅトレンチ土層断面（東から）

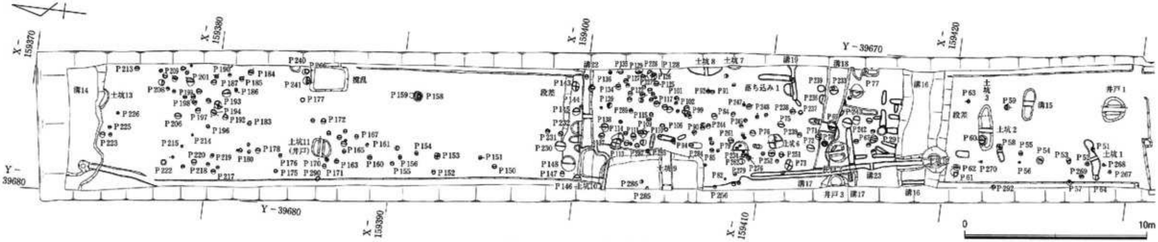


図29　８Ｅトレンチ第２面平面図

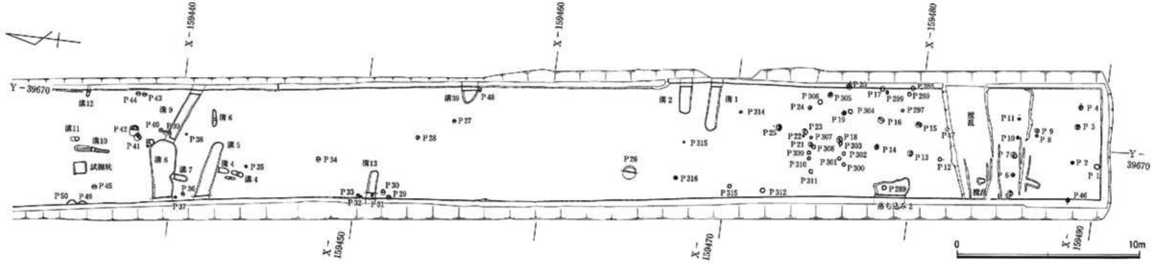


図30　９Ｅトレンチ第２面平面図

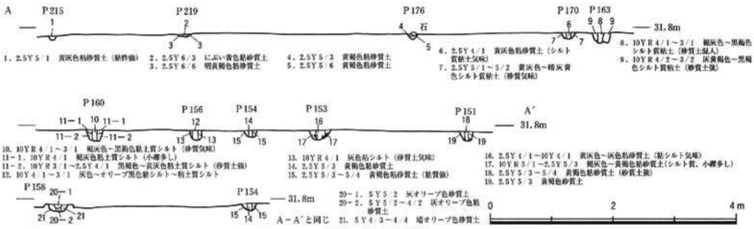


図31　ピット断面図

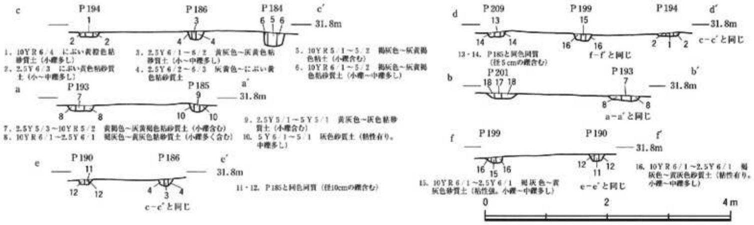
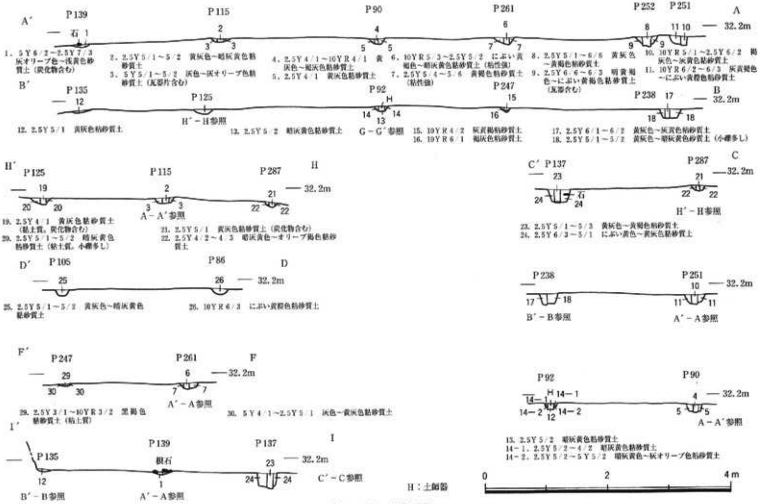


図32　ピット断面図



A′
P139
石 1
P115
2
3 3
P90
4
5 5
P261
6
7 7
P252
P251
8
9 9
11 10
A
32.2m
1. 5Y6/2～2.5Y7/3 灰オリーブ色～浅黄色砂質土（炭化物含む）
2. 2.5Y5/1～5/2 黄灰色～暗灰黄色粘砂質土
3. 5Y5/1～5/2 灰色～灰オリーブ色粘砂質土（瓦器片含む）
4. 2.5Y4/1～10YR4/1 黄灰色～褐灰色粘砂質土
5. 2.5Y4/1 黄灰色粘砂質土
6. 10YR5/3～2.5Y5/2 にぶい黄褐色～暗灰黄色粘砂質土（粘性強）
7. 2.5Y5/4～5/6 黄褐色粘砂質土（粘性強）
8. 2.5Y5/1～6/6 黄灰色～黄褐色粘砂質土
9. 2.5Y6/6～6/3 明黄褐色～にぶい黄褐色粘砂質土（瓦器含む）
10. 10YR5/1～2.5Y6/2 褐灰色～灰黄色粘砂質土
11. 10YR6/2～6/3 灰黄褐色～にぶい黄橙色粘砂質土
B′
P135
12
P125
H′－H参照
P92
H
14 14
13
G－G′参照
P247
15
16
P238
17
18 18
B
32.2m
12. 2.5Y5/1 黄灰色粘砂質土
13. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘砂質土
15. 10YR4/2 灰黄褐粘砂質土
16. 10YR6/1 褐灰色粘砂質土
17. 2.5Y6/1～6/2 黄灰色～灰黄色粘砂質土
18. 2.5Y5/1～5/2 黄灰色～暗灰黄色砂質土（小礫多し）
H′
P125
19
20 20
P115
2
3 3
A－A′参照
P287
21
22 22
H
32.2m
19. 2.5Y4/1 黄灰色粘砂質土（粘土質、炭化物含む）
20. 2.5Y5/1～5/2 暗灰黄色粘砂質土（粘土質、小礫多し）
21. 2.5Y5/1 黄灰色粘砂質土（炭化物含む）
22. 2.5Y4/2～4/3 暗灰黄色～オリーブ褐色粘砂質土
C′
P137
23
24 石 24
P287
21
22 22
H′－H参照
C
32.2m
23. 2.5Y5/1～5/3 黄灰色～黄褐色粘砂質土
24. 2.5Y6/3～5/1 にぶい黄色～黄灰色粘砂質土
D′
P105
25
P86
26
D
32.2m
25. 2.5Y5/1～5/2 黄灰色～暗灰黄色粘砂質土
26. 10YR6/3 にぶい黄橙色粘砂質土
P238
17 18
B′－B参照
P251
10
11 11
A′－A参照
32.2m
F′
P247
29
30 30
P261
6
7 7
A′－A参照
F
32.2m
29. 2.5Y3/1～10YR3/2 黒褐色粘砂質土（粘土質）
30. 5Y4/1～2.5Y5/1 灰色～黄灰色粘砂質土
P92
H 14－1
14－1
14－2 14－2
12
P90
4
5 5
A－A′参照
32.2m
13. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘砂質土
14－1. 2.5Y5/2～4/2 暗灰黄色粘砂質土
14－2. 2.5Y5/2～5Y5/2 暗灰黄色～灰オリーブ色粘砂質土
I′
P135
12
B′－B参照
P139
根石
1
A′－A参照
P137
23
24 24
C′－C参照
I
32.2m
H：土師器
0
2
4m

図33　ピット断面図

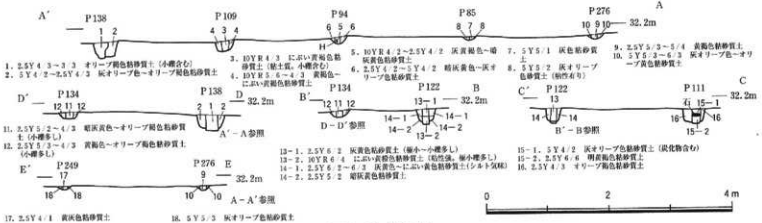


図34　ピット断面図

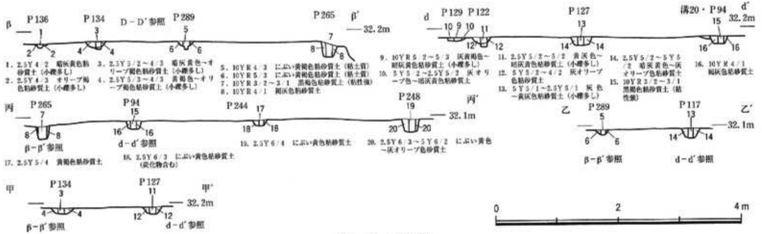


図35　ピット断面図

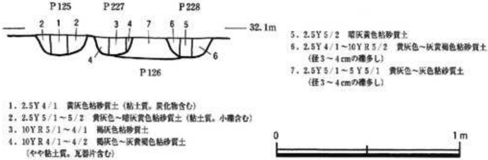


図36　P125・126・227・228断面図

P209・199・194は、主軸を北東－南東方向におき、分類の①に当たる。P194・186・184に対してほぼ90°である。全長は2.8m、ピット間の距離は1.4mである。柱根痕跡の径0.08～0.12mである。埋土は、P199以外が柱根痕跡、掘り方ともに粘砂質土である。P199は柱根痕跡、掘り方に小礫を多く含む褐灰色～黄灰色砂質土である。このピット列と同方向のものは、P190・186である。P190・186は、ピット間の距離が1.3mを測る。

P209・199・194と同方向のピット列は、他にP213・208・197がある。ピット間の距離は2mで、全長4mを測る。

P215・219・176・170・163の主軸方向は先のピット群と異なり、北北西－南南東方向におく。分類の③に当たる。全長は約9mを測る。各ピット間の距離は、P219・176が3.7mを、P176・163が3.2mを、P215・219が2.2mを、P176・170が2.5mを測る。柱根の痕跡は、P215以外確認できた。その中でP163は、径が0.1mと大きく、掘り方底部面も0.02mほど下がり、痕跡が明確に残る。P176では根石と推測される石を検出した。埋土はP215・219・176が柱根痕跡、掘り方ともに、粘砂質土である。P170・163は、柱根痕跡が粘質土（シルト質粘土）もしくはシルト質粘土（砂質土混入）で、掘り方がシルト質粘土（砂質土気味）である。P215・219・176・170・163とほぼ同一方向のピットは、P160・156・154・153・151である。ピットの平面形は不整な隅丸方形を呈する。この中でP153は、他のピットに比して大きさが約3.5mと大きいものである。柱根の痕跡は総てに検出している。柱根痕跡・掘り方の埋土は、P160・156が粘土質シルト・粘シルトで、他は粘砂質土・砂質土である。全長は6mで、ピット間の距離は、P160・156が1.65m、P156・153が2m、P153・151が2.4mである。P156と153のほぼ中間にP154が在り、このピットを中心に東へ90°振ると、P158が位置する。ピット間の距離は3.1mを測る。ピットの径は0.35m、柱根径は0.2mで、深さは0.17mである。なお本ピット群の周辺には、他に分類①や②のピット列も存在する。

調査区中央部の溝22と溝16の間には、多数のピットが集中しており、一見乱雑の様相を呈しているかのようであるが、しかし注意して細かく見ると、先の分類で並んでいるものもある。ピットの配列は色々考えられそうで、先の分類に新たな主軸方向のものがあり、④北北東－南南西方

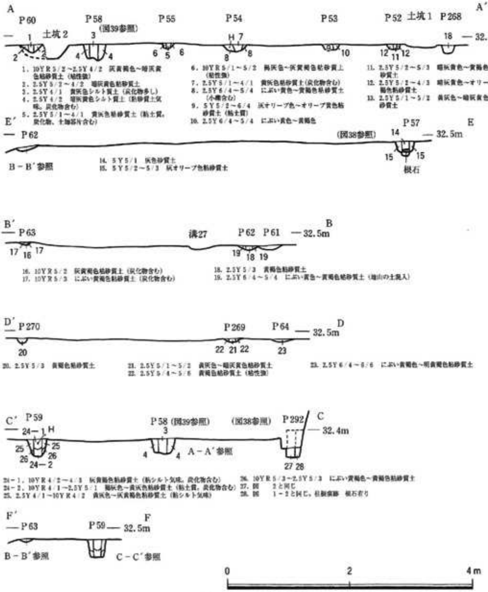


図37　ピット断面図

向のものである。④はＰ139・115・90・261・252・251である。ピットの平面形は円形に近い方形である。大きさは0.3～0.4mを測る。Ｐ252・251は深さが0.15mとやや深い。いずれも柱根の痕跡を確認した。柱根径は0.07～0.13mを測る。全長は9.9～9.95mを測り、ピット間の距離はＰ139・115が2.3m、Ｐ115・90が2.55m、Ｐ90・261が2.1m、Ｐ261・252が2.3m、Ｐ261・251が2.9mである。埋土については柱根痕跡・掘り方共に粘砂質土である。なおＰ139から根石と思われる石が、Ｐ115・252では瓦器片が出土している。Ｐ139・115・90・261・252・251と同方向のものは、Ｐ135・125・92・247・238である。

図38　P292・57断面図

P135・125・92・247・238・237は、平面形が不整円形・不整隅丸方形をを呈する。全長は10mを測る。ピット間の距離はP135・125が2m、P125・92が2.85～2.9m、P92・247が2m、P247・238が2.6m、P247・237が3.1mを測り、先のピット列とはほぼ同じ距離である。大きさは0.15～0.3mを、深さは0.05～0.15mを測る。柱根痕跡はP135を除いて確認した。柱根痕跡の径は0.8～0.1mである。P92の柱根痕跡の埋土中から土師器片が出土している。柱根痕跡・掘り方の埋土は、粘砂質土・砂質土である。このピット列と同方向のものは、P134・122・102・99・84・245である。

P134・122・102・99・84・245は全長7mを測る。ピット間の距離は1.4m、1.85m、0.65m、1.5m、1.6mである。大きさは0.15～0.35mである。P134・122では柱根の痕跡を確認した。これらのピット列を中心として90°にとると、P135・139・137が並ぶ。

P135・139・137は、主軸方向を西北西－東南東方向におく。全長が3.7mを測り、ピット間の距離は1.8mを測る。P137は他に比して大きく、また深さもある。深さは掘り方が0.2mで、柱根部分が更に0.03m程下がる。柱根痕跡の径は0.08mである。P139の柱根痕跡では、炭化物を多く検出した。

主軸方向が、西北西－東南東方向におくものを新たに⑤とする。先のピット列以外にP125・115・287、92・90、247・261、238・252（又は251）である。

写真56　P69遺物出土状況（西から）

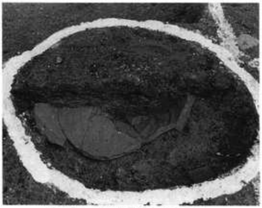


写真57　P69土層断面（西から）

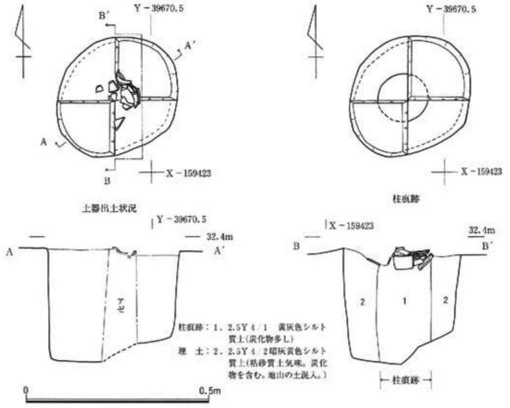


図39　P58平面・断面図

P125・115・287のピット間の距離は2m、1.75mで、全長は3.75mである。P125・287の柱根の痕跡では炭化物を含む。

P92・90のピット間の距離は2.2mを、247・261では2mを測り、238・252（又は251）では2.5mを測る。P247柱根痕跡の埋土は、黒褐色粘砂質土である。またP92の柱根痕跡の埋土中から

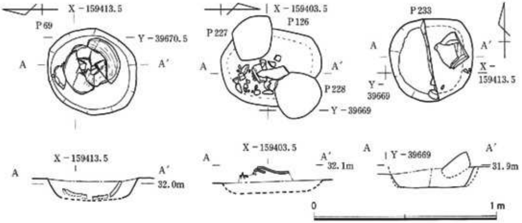


図40　P69・126・233平面・断面図

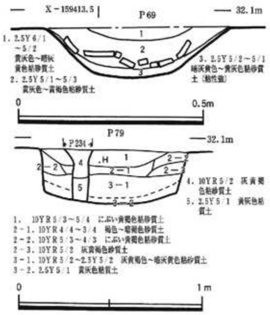


図41　P69・79・234断面図

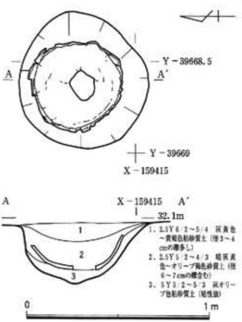


図42　P77平面・断面図

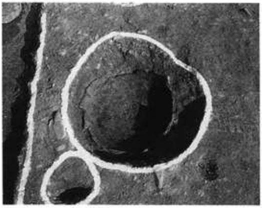


写真58　P77遺物出土状況（西から）

写真59　P77土層断面（西から）

は土師器片が出土している。

P138・109・94・85・276・(74) は、分類④に相当する。P74はこの一群に入るかどうか不明である。大きさは0.15～0.45mで、深さは0.05～0.25mである。大きさ、深さ共にP138が優っている。P74を除き、柱根の痕跡を確認した。柱根痕跡の径は、0.07～0.25mを測る。ピット列の全長は9.6m、ピット間の距離は2m、1.85m、2.15m、2.05m、1.6mである。

分類①のピット列は、P265・94・244・248である。全長6mを測り、ピット間の距離は1.5、2.1、2.5mである。いずれも柱根の痕跡を確認した。P244の掘り方の埋土中では、炭化物を検出した。このピット列を中心にして90°に振ると、P94・117・127・129が並ぶ。

P94・117・127・129は、全長が4.2mで各ピット間の距離が、2.25m、1.6m、0.4mである。なおP117・129間は2mである。いずれも柱根の痕跡を確認している。柱根痕跡は、径が0.1〜0.12mを測る。P127は、掘り方底部よりさらに0.1m下がる。埋土については、柱根痕跡・掘り方共に粘性の砂質土である。このピット列と同方向のものは、P265・289・134・136である。

P265・289・134・136は、全長が4.75mを測り、各ピット間の距離は2.35m、1.45m、0.95mである。なおP289・136間は2.4mである。いずれからも柱根痕跡を確認しており、径が0.08〜0.12mを測る。P289・134・136は、底部から更に0.03〜0.05m程下がる。

これら一群の他にもピット列として多く並ぶようであるが（図33・34・35）、細かい分析は後日に譲りたい。

溝22と溝16の間には、以上のピットとは大きさが違うピットが存在する。大きさは、径（最大、最大長）が0.5〜0.85mを測るものである。この中には土坑6の様に、土坑として登録したものもある。これらの遺構は、平面形が円形のものや、不整な円形または不整な方形を呈しており、その中には遺物を伴うものも在る。遺物が出土するピットの中に、土坑として考えた方が良いものもあるが、この中で記述しておく。

P126はP125・129に接して位置し、P227・228によって切られている。平面形は楕円形を呈しており、大きさは0.55×0.42mを、深さが0.05〜0.1mを測る。ピットは削平されている可能性もあるが、直上より瓦質土器の羽釜と甕が出土している。なおP228からも土器が出土しており、P126と同様な瓦質土器の擂鉢である。

P69は井戸2の東側に近接して位置し、溝18と重複している。ピットは断面観察により溝18の肩部を切っているので、溝よりも新しい時期と考えられる。平面形は不整な円形を呈している。大きさは径が約0.5mを測り、深さは0.1mを測る。ピット内では土師質土器の甕底部を確認した。土師質土器は湊焼と推測される。甕の上部は削平されており、全体の器形は不明である。土器は、ピットの底部に暗灰黄色〜黄灰色粘砂質土（粘性強）を敷き、その上に土器を置いている。

P77は、P69の東南東方向に約2.4m離れて位置する。平面形は不整な円形を呈している。大きさは0.75×0.7mを測り、深さは約0.35mを測る。本遺構ではP69と同様に遺物が出土している。瓦質土器の甕底部である。甕の上部は削平を受け、全体の器形が不明である。なお甕の底部には径0.15mほどの孔が打ち欠かれている。本遺物もピットの底部に灰オリーブ色粘砂質土（粘性強）が敷かれ、その上に置かれている。

P79はP77の北西方向に約5m離れ、土坑6とは隣接して位置する。平面形は不整な円形を成す。大きさは約0.8mを、深さが0.3mを測る。本遺構は、幾つかのピットと重複している。土坑内の埋土は、大きく3層に分けられる。上層より、砂質土、粘砂質土、粘砂質土および粘質土である。

P113・114は土坑9の東肩部に位置する。ピットはお互いに重複し、P113が新しい時期である。P113は平面形が楕円形で、P114は隅丸方形である。大きさはP113が0.55×0.4m、P114

は0.65×0.5mである。深さはP113が0.03m、P114が0.2mである。

P143・144・232・231・230は、溝22に沿って位置し、ほぼ東西方向に並ぶ。大きさは0.4～0.85mを測る。深さは0.05～0.15mを測り、P143・230の深さは0.13m、0.15mである。

調査区南端部の溝16より以南では、調査区中央部と比較してピットは非常に少ないが、ピット列として認識出来るものがある。P60・58・55・54・53・52・268等である。

P60・58・55・54・53・52・268は、ほぼ東西方向に並ぶ。全長7.2mを測り、そのピット間の距離は、1m、1.2m、1.2m、1.6m、0.95m、0.9mを測る。平面形はほぼ円形を呈する。大きさは0.15～0.4mを測る。深さは0.1～0.25mを測り、P58が他のものよりも深い。柱根の痕跡はP268を除き総て確認した。なおP58では、柱根の痕跡埋土の上位で、黒色土器が出土している。土器は体部片と底部片である。ピットの時期は、ほぼこの時期と考えられる。

他に並ぶピットとしては、P62・60・59とP292・58・59である。P62・60・59は、全長が4.3mで、ピット間の距離が2.2mを測る。P292・58・59は全長が4.4mを測り、ピット間の距離が2.2mを測る。いずれも柱根の痕跡を検出した。柱根痕跡の径は0.1～0.15mを測る。

本ピット群の中で根石を有するものがあり、P52の西側に位置するP57がそれである。本ピットでは柱根の痕跡を確認しており、掘り方底部をさらに0.05mほど下げている。丁度この境の所で根石を検出した。根石は径0.12mを、厚さ0.04mを測る。

井戸

明確に井戸として分かる遺構は、4基数えられる。そのうち1基は当初土坑としたもので、遺構の登録番号もそのままで変えていない。井戸の立地を全体的に見れば、ピットの周辺に見られ、調査区の南半部が顕著である。4基は総て素掘りの井戸である。

土坑11は調査当初に土坑としたものである。遺構の平面形は不整な隅丸方形を呈しており、大きさは1.1×1mを測る。深さは約1.5mを測る。断面の形状は底部付近で袋状に広がり、また肩部の近くでも若干の段を付けている。埋土により大きく3層に分けられ、上層より粘砂質土、粘砂質土（上層よりきめが細かい）、シルト質粘土である。上層・中層からは瓦器片・土師器片・瓦片が出土している。

井戸1は調査区の南端に位置し、ピット群の東側に位置する。平面形は不整な円形を呈しており、大きさが1.4×1.25mを、深さが2.2mを測る。全体の断面形は、漏斗状を呈する。底部で径0.25m、深さ0.3mのピットが掘削されており段状と成す。さらに肩部へ向かって広がり、井戸の中ほどで緩やかな段をつけ、やや広がりながら肩部に至る。埋土は、大きく3層に分けられ、層中には小礫が含まれる。上層より粘砂質土、粘性の強い粘砂質土、粘土・シルト質粘土である。遺物としては須恵器・黒色土器等が出土している。須恵器は、井戸が埋められた時に混入したものと推測される。

井戸2はP69の西側に位置し、溝18を切っているが、溝24によって切られている。平面径は、不整な円形を呈する。大きさは1.2×1.1mを測る。深さについては、安全を期したために完掘し

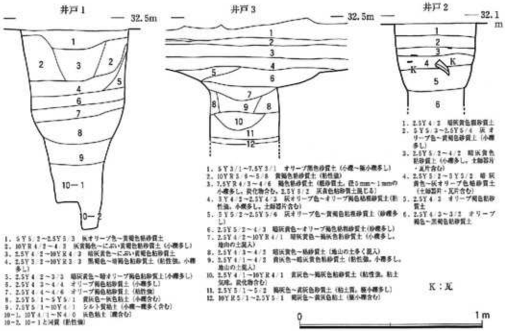


図43　井戸1・2・3断面図

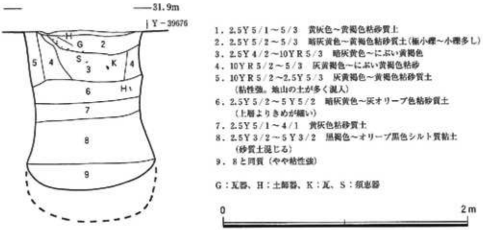


図44　土坑11断面図

なかったので不明であるが、1m以上を測るものと思われ、井戸1と同等の深さが推測される。断面形も同じ漏斗状を呈すると思われる。肩部から0.7m下がった箇所で緩やかな段を付け、真っ直ぐに底部へ至る。出土遺物としては、上層で土師質の湊焼甕口縁部がある。その下層では、土師器片や瓦等が出土している。

井戸3は井戸2の西側に位置し、約1/2が調査区外である。平面形は不整な円形と思われる。大きさは、径が1.4mを測る。深さは、遺構が現在の道路際と云う事もあり、安全を期して底部

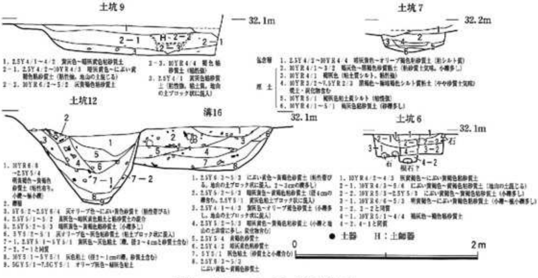


図45　土坑6・9・12、溝16断面図

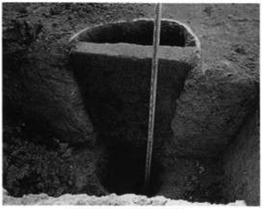


写真60　井戸（東から）

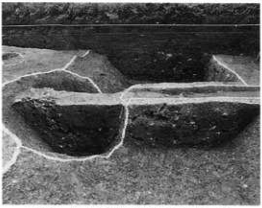


写真61　土坑12、溝16土層断面（東から）

まで完掘できなかった。その為に深さは不明瞭であるが、0.8m以上を測るものと推測される。埋土には地山の土や小礫が多く混入しており、下層へ行くに従って粘性度が強くなる。また中層で炭化物を含んだ土壌も確認している。

土坑

土坑として登録したものは、13基ある。その中には先述したP69・77のように墓として登録した方がよいものや、また当初土坑として登録し、調査最終の段階で井戸と判明した土坑11もある。さらに土坑1・2の様に溝としてもよいものもあるが、仮に登録して番号を与えた。分類の基準としては、土層観察で埋土に人為的なものが認められる事、また深さも有る事とした。

土坑1・2・3は、調査区の南端に位置する。溝の可能性が大である。土坑1は井戸1の西側に位置し、全長が2.3mを、幅が0.5mを、深さが0.3mを測る。土坑2・3は、溝15と16の間に

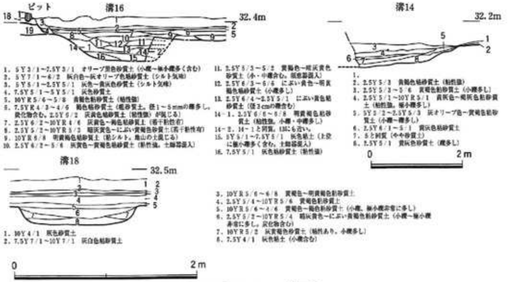


図46　溝14・16・18断面図

位置し、遺構自体は重複している。土坑２の平面形は、隅丸長方形を呈すると思われる。全長は2.5m（土坑２の全長は２m）を、幅が0.8mを測る。深さは0.13mを測る。両者の主軸方向は、北東－南西方向におく。いずれからも遺物の出土はない。

土坑４・５は溝18の南肩部に接している。溝18によって切られたものであり、大半が壊されている。平面形は円形が推測される。直径は約１mを測るものと推測され、深さは約0.1mを測る。

土坑６は、P79の南東側に位置する。平面形は不整な隅丸方形を呈する。大きさは0.8×0.75mを測り、深さは0.25mを測る。なお本遺構の中央に径0.25mの円形ピットが存在する。深さは0.32mを測る。底部では根石と考えられる石が出土している。ピットは本遺構に伴うものかどうか不明である。土坑とピットの埋土は明確に区別でき、両者ともに小礫を多く含む。

土坑７・８はP92の東側に位置し、大半が調査区外である。平面形は円形と推測される。大きさは、土坑７が径0.7m以上を、土坑８は1.9m以上を測るものと思われる。深さは土坑７が0.17mを、土坑８が0.27mを測る。土坑７では埋土に炭化物を含んだ土壌を確認している。なお土坑７・８は、以前調査の第４調査区の井戸13の南側に位置する遺構と繋がるものと考えられる。

土坑９は溝22の南側に隣接し、ピット群の西側に位置する。本土坑は、土坑10と重複しており、土坑10によって肩部の一部が切られている。土坑は全体を確認しておらず、遺構自体はさらに調査区外へ延びるものである。土坑はP113の箇所で段状に掘削されており、約0.06m下がったところで更に落ち込んでいる。平面形は隅丸の方形を呈するものと推測される。大きさは5.7×2.5m以上を、深さは約0.3mを測る。埋土は大きく３層に分けられ、上層より粘砂質土、粘砂質土（粘性強）、粘砂質土（粘土質）および砂質粘土である。いずれの層にも小礫と地山の土がブロック状に混入している。なお土坑の底部において２基のピット、P285・286を確認した。大きさは、

径が0.15～0.2mを、深さが0.02～0.06mを測る。断面観察では、土が堆積する以前に掘削されたものと考えられる。出土遺物としては、瓦器や土師器の細片がある。

土坑10は、溝22の西側に位置し、溝22を切っている。本遺構はさらに調査区外へ延びる。平面形は不整な方形と推測される。大きさは2.2×1.4mを、深さは0.2mを測る。埋土は土坑9と同様な土で、2.5Y6/4～7/4にぶい黄色～浅黄色粘砂質土（粘性強）である。埋土には中礫～大礫が多く含んでいる。

土坑11・12についてみると、土坑11は井戸の項で記述した通りである。土坑12については、溝16の西側に位置し、溝16の南肩部を切って掘削されている。平面形は不整な円形を呈し、断面形は擂鉢形を呈する。大きさは1.3～1.5mを測り、深さは約1mを測る。埋土は大きく3層に分けられ、上層より砂質土、粘砂質土、粘土である。いずれの層にも礫が多く含まれている。出土遺物には、土師質土器や瓦質土器が多く出土している。土師質土器には、羽釜や杯等があり、瓦質土器では甕や鉢が見られる。また瓦器碗等も出土している。

土坑13は調査区の北端、溝14の南肩部に位置する。土坑は溝14によって切られており、一部のみが残存している。大きさは、径が1.1m以上、深さは0.06mと浅いものである。

溝

溝は調査区の北端部と中央部、南端部で確認した。溝は、鋤溝とそれ以外の溝に分けられる。

溝14は調査区の北端に位置し、溝の南肩部を確認した。大半が調査区外へ延びる。現存長は7m以上を、幅3.5m以上を、深さは0.3～0.4mを測る。底部は東側が低い。埋土には礫が多く混入している。遺物は、須恵器や土師器、土師質土器、瓦質土器、瓦器、陶器等が多量に出土している。なお、本遺構は第4調査区の土坑72に繋がるものである。

溝16は、調査区南半部の一段下がった箇所に位置し、調査区外へ延びる。現存長は8m、幅は2.1～2.3mを測る。深さは0.46～0.48mを測り、段差の箇所からだと0.63～0.75mを測る。断面形は肩部(上方)に向かって広がるU字形である。主軸はほぼ東西方向におき、東から西へ向かって走行している。埋土は、地山土がブロック状に混入しており、底部で灰色粘土が認められた。遺物は多量に出土しており、埴輪片、黒色土器片、土師器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦等多彩である。特に梵字紋の軒丸瓦（図83－23、写真112－1）は注目される。なお溝は第4調査区の土坑45に繋がる。

溝18は、主軸が溝16と同一方向である。西側は溝17によって切られているが、現存長は6mを測る。幅は0.8～1.3mを測り、深さは約0.2mを測る。断面形はU字形である。溝の底部に灰色粘土が認められる。遺物は少量ながら出土している。第4調査区の遺構に繋がる。

溝22は土坑10の東側に位置し、土坑10によって切られているが、断面観察で痕跡は残る。現存長は約4.5mを測る。幅は0.6～0.8mを、深さは約0.1mを測る。遺物は若干ではあるが出土している。第4調査区の遺構に繋がる。

（2）９Ｅトレンチ

本トレンチは８Ｅトレンチの南側に接して位置する。遺構面は８Ｅトレンチと同様で、旧耕作土・床土を除去した段階で第１面とし、その下位に堆積する層厚約0.05mの遺物包含層を除去して第２面とした。第１面は畦畔状遺構や鋤溝を検出した。第２面は北端部と南端部が、旧耕作土の上に覆う撹乱土・盛土が、本遺構面まで及んでいる。南端の撹乱坑（溝）は第４調査区にまで及んでいる。遺構面の標高は、北端部でT.P.＋32.4mを、中央部でT.P.＋32.52mを、南端部でT.P.＋32.62mを測り、北から南へ徐々に高くなる。標高差は約0.2mある。遺構としては、第１面で畦畔状遺構、鋤溝を検出し、第２面では建物が想定されるピット群や溝、落ち込みを検出した。

ピット

ピットの立地を見ると、溝39とP26を境にして二分する事が出来る。溝39から北側を北半部、P26から南側を南半部とする。

北半部のピットは、南半部のピットに比して散在的である。溝８・９の周辺において見られる。その中で特にP41・42は、柱根痕跡が残るものである。P41は、平面形が不整な隅丸方形を呈する。大きさは、１辺が約0.4mを測り、深さは0.24mを測る。柱根痕跡の径は0.16mである。P42はP41に切られている。平面形は隅丸方形を呈し、柱根痕跡が残る。掘り方の大きさは、0.6×0.5mを測り、深さは0.24mを測る。柱根痕跡は、径が0.15mある。ピットの周辺には、径0.1～0.5mのピットが見られる。

南半部では、落ち込みの西側に於いて幾つか並ぶピットが存在する。P25・23・18・14・13・12である。P12・23を除いて柱根の痕跡を確認した。また、P13・14では根石が出土している。ピット列の主軸方向は、ほぼ南北方向

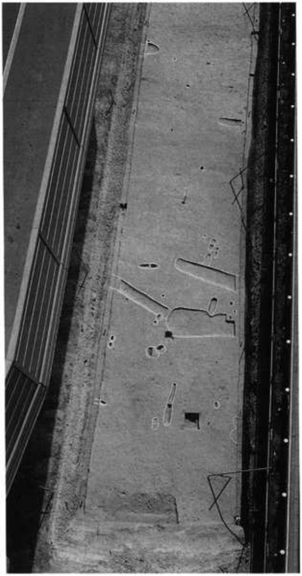


写真62　９Ｅトレンチ北半部全景（北から）

におき、全長が9mを測る。各ピット間の距離は1.5m、2m、2m、1.9m、1.6mである。ピットの平面形は、ほぼ円形を呈する。大きさは0.2～0.4mを測り、深さは0.15～0.3mを測る。柱根痕跡の径は0.12～0.2mである。根石の大きさは、P13が握り拳大で、P14が径約0.1m・厚さ0.02mを測る。なおP14の柱根痕跡には、炭化物が認められた。このピット列とほぼ同方向に並ぶのがP24・9・16・15・47である。

P24・19・16・15・47は、主軸方向をほぼ南北方向におき、全長は7.6mを測る。ピット間の距離は1.9m、2m、2.1m、1.6mである。ピットの平面形は、ほぼ円形を呈する。大きさは0.25～0.4mを、深さは0.16～0.29mを測る。柱根痕跡は径0.13mを測る。

写真63　9Eトレンチ南半部全景（南から）

これらのピット列を中心にして、先ずP23・24、P18・19・20、P14・16・299（または17）、P13・15、P12・47がほぼ東西方向に並ぶ。P23・24の全長は1.3mを、P18・19・20は2.9m、P14・16・299（または17）は3m、P13・15は1.6m、P12・47は1.6mを測る。

さらにP24・9・16・15・47の軸線を南へ約4mほど伸ばすとP10に至り、P25・22・18・14・13・12の軸線も同様に南に延ばすとP6に至る。P10とP6は主軸がほぼ東西方向におき、P5・6・7・10・11と並ぶ。

P5・6・7・10・11は、全長が4mを測り、各ピット間の距離は1mを測る。ピットの平面形は、円形と不整な隅丸方形である。P5・7は平面形が不整な方形で、他のものよりも大きい。P5・7は、1辺が0.3～0.35mである。このピット列と同じ主軸方向のものは、P46・2・3・4である。全長は5mを測る。いずれも柱根痕跡を確認した。これらのピットの中に、先のピットと対応するものがあり、P46とP5、P2とP7、P3とP11で

ある。なおＰ２の南側に1.3m離れてＰ１が存在し、Ｐ７・Ｐ２・Ｐ１とが直線上に並ぶ。遺物としては、Ｐ７・２で土師器片が出土しており、また柱根痕跡の埋土には炭化物を確認した。

Ｐ26は調査区の中央部に位置し、Ｐ316の北側に位置する。平面形は円形を呈する。大きさは径が0.75mを測り、ピットの中では大きいものである。深さは0.25mを測る。埋土は粘土質シルトで極小礫を含んでいる。

落ち込み

落ち込みは先述したピット列の西側に位置し、調査区外へ延びる。大きさは1.9×1.4mを測り、深さは約0.1mを測る。落ち込み内にはピットが存在し、一連のピット群と考えられる。

溝

溝は鋤溝のような幅の狭い小溝と、それ以外の幅の広い溝を確認した。溝１・２はピット列の北側に位置する。幅は両者共に0.65mを測る。この溝は、第４調査区の方へ延びている。深さは0.06mを測る。

溝５・８・９は北半に位置しており、いずれの溝も調査区外へ延びる。幅は0.8m、1.2~1.4m、1.1~1.4mである。深さは0.08m、0.09m、0.1mを測る。溝５と溝９はほぼ同一方向に走行し、溝８は東西方向に走行する。

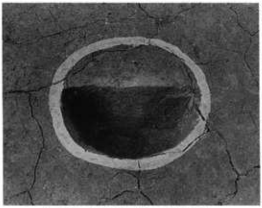


写真64　Ｐ15土層断面（東から）

写真65　Ｐ14土層断面（南から）

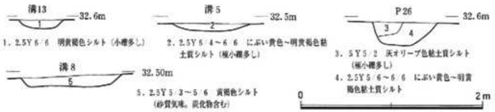


図47　９Ｅトレンチ P26、溝５・８・13断面図

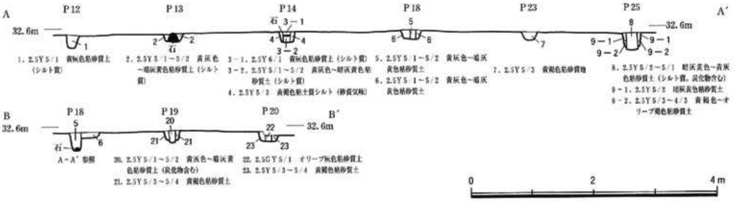


図48　ピット断面図

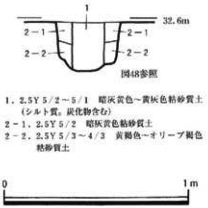


図49　P25断面図

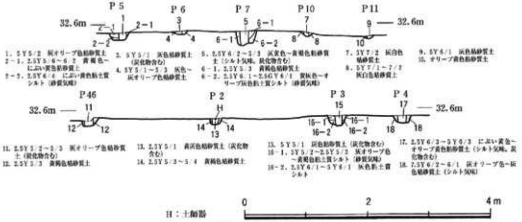


図50　ピット断面図

（3）10Eトレンチ

本調査区は、追加の工事に伴って行った調査地区で、9Eトレンチの南側に接して位置する。地表面から攪乱層を除去すると、旧耕作土および床土が検出され、直ぐに地山層が確認される。そしてこの面に遺構が形成される。この状況は9Eトレンチの攪乱坑（溝）の南側と同じ状況で、後世に幾分か削平が行われていると考えられる。遺構面は、北から南へ緩やかな傾斜で高くなる地形である。遺構としては、ピット、落ち込み、溝がある。

ピット

ピットは16基を検出した。ピットは調査区の全体を占める。これらピットの中には並ぶものが幾つかある。先ずP328・323・318・332である。全長は7.2mを測り、主軸方向は若干東へ振るもののほぼ南北方向におく。各ピット間の距離はP328・323が2.5mを、P323・318が2.5mを、P318・332が2.2mを測る。ピットは平面形は、P323を除き円形である。P323は不整な円形を呈する。大きさは径が0.3～0.4mを測る。深さは0.14～0.40mを測り、P332は、他のピットよ

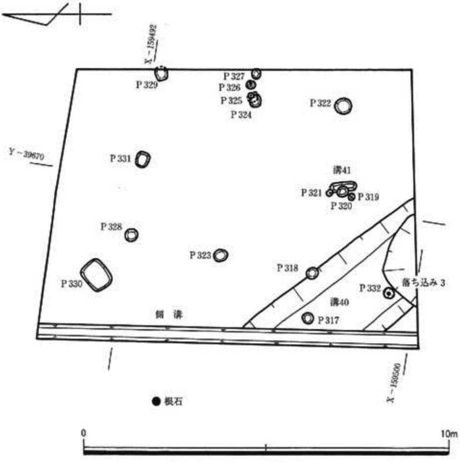
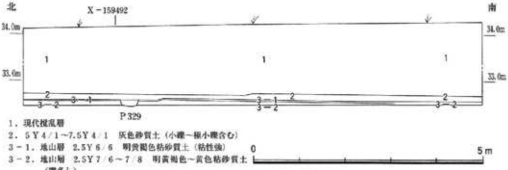


図51　10Eトレンチ平面図

写真66　10Ｅトレンチ全景（東から）

写真67　10Ｅトレンチ全景（北から）



1．現代撹乱層
2．5Y4/1～7.5Y4/1　灰色砂質土（小礫～極小礫含む）
3－1．地山層　2.5Y6/6　明黄褐色粘砂質土（粘性強）
3－2．地山層　2.5Y7/6～7/8　明黄褐色～黄色粘砂質土（礫多し）

図52　10Ｅトレンチ土層断面図

りも深いものである。柱根痕跡は、総て確認した。柱根の痕跡は、径が0.12～0.15mを測る。各ピットの埋土は、掘り方が粘砂質土で、柱根の痕跡が炭化物を含む粘砂質土である。Ｐ332では、根石と推測される石を検出した。根石は長さ0.21mを、厚さ0.05mを測る。なおＰ332の底部には、径0.09m、深さ0.06mの柱根痕跡が残る。遺物は、Ｐ332より土器片が多く出土しており、特に根石の下層から確認でき、またこの層中においては、木片が多く認められた。このピット列を中心にして90°東にとると、Ｐ328・331・329が並ぶ。

Ｐ328・331・329は、Ｘ－159492ラインに位置する。全長は4.5～4.6mを測り、各ピット間の距離は、Ｐ328・331が2.1mで、Ｐ331・329は2.5mである。ピットの平面形は、Ｐ331・329が隅丸の方形を成し、Ｐ328は円形を成す。大きさは、径及び１辺が0.4mを測る。深さは0.12～0.21mを測る。柱根痕跡の径は、0.15～0.18mを測る。埋土は掘り方・柱根痕跡共に粘性の砂質土で、柱根痕跡では炭化物が確認できる。遺物はＰ329より、瓦器片・土師器片が出土している。

Ｐ323・326（または324・325）は、Ｐ328・331・329のピット列の南側約2.4～2.5m離れて位置し、主軸方向も同方向におく。全長は4.7mを測る（Ｐ324であれば4.3m、Ｐ325であれば4.5mである）。Ｐ326は平面が円形である。大きさは0.2mを測る。深さは0.8mを測る。柱根の痕跡

写真68　10Ｅトレンチ土層断面（西から）

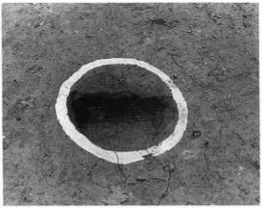


写真69　Ｐ323土層断面（南から）

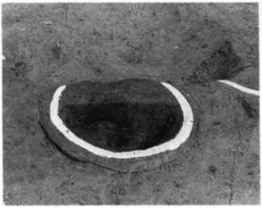


写真70　Ｐ318土層断面（南から）

写真71　Ｐ332土層断面（東から）

が認められ、径0.12mを測る。ピットの肩部から0.2m下がった掘り方の底部で根石を確認した。根石は径0.13を、厚さ0.06mを測る。柱根痕跡は根石を除去して検出した。掘り方底部から0.1m下がる。遺物は土器片が出土している。なお埋土中には、炭化物や焼土が認められた。この2基のピット列の軸線を東に伸ばすと、Ｐ327が位置する。Ｐ326とは0.4m離れ、Ｐ323からだと5m離れている。

Ｐ318・321（またはＰ320）・322は、Ｐ323・326の南側に2.5m離れて位置する。全長は4.7mを測り、各ピット間の距離は2.3m、2.4mである。主軸の方向はＰ323・326と同一方向である。いずれも柱根の痕跡を確認している。ピットの平面形は円形で、大きさは0.2～0.4mを測る。深さは0.1～0.4mである。遺物はＰ321・322で土師器片が出土している。なお本ピット列の軸線を西へ伸ばすとＰ317に至る。Ｐ318とは1.2m離れる。またＰ321の南側に0.4m離れてＰ319が存在する。Ｐ319の深さは0.16mを測る。柱根痕跡の径は0.06mである。Ｐ317は深さが0.06mである。

Ｐ331・321・320・319のピット列と、Ｐ329・325・322のピット列は、Ｐ328・323・318・332

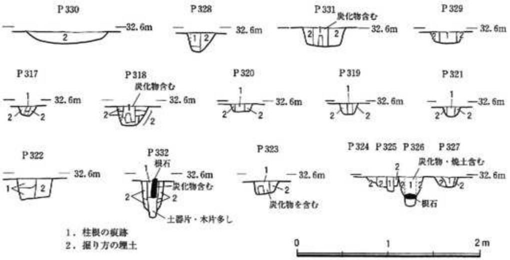


図53　ピット断面図

の主軸方向とほぼ同一方向で、南北方向におく。P331とP321の柱間距離は5.2mを測る。P329・325・322のピット列の全長は5.1mを測り、各ピットの柱間距離は2.5mを測る。

P330はP328の北西に位置する。平面形は隅丸の長方形を呈する。大きさは0.85×0.65mを測り、ピットの中では一番大きいものである。深さは0.13mを測る。主軸は北東－南西方向におく。埋土は、小礫を多く含む粘性の砂質土である。本遺構は、土坑の可能性もある。

落ち込み

落ち込みは、調査区の南端部に位置し、遺構は調査区外に延びる。遺構は溝40を切っている。平面形は円形もしくは不整な円形を呈する。大きさは、径が3.2mを測り、深さは0.5mを測る。埋土は粘性の砂質土で、小礫を多く含んでいる。遺物としては、瓦質土器の羽釜等が出土している。なお本遺構は、とりあえず落ち込みとして登録したが、土坑の可能性も否定出来ない。

溝

溝40は調査区の南西端に位置し、調査区外へ延びる。遺構は、落ち込み3によって切られている。現存長は6mを、肩部幅は2.5mを測り、底部幅は約1.5mを測る。深さは0.2mを測る。溝の主軸方向は北西－南東方向におき、南東から北西に向かって走行する。断面形はU字形を呈する。埋土には、粘性の砂質土に地山の土がブロック状に混入し、礫を多く含んでいる。遺物は、土器片が出土している。

溝41は、溝40の東側に位置する。P320・321によって切られ、大半が壊されて一部のみ残存する。幅は0.25mを、深さは0.07mを測る。溝の断面形は逆梯形で、底部が平坦を成す。

３．Ｆ地区

Ｆ地区は、今回調査を行った調査区において一番南端の地区に当たる。Ｆ地区を調査の都合で2分し、北側を10Ｆトレンチ、南側を11Ｆトレンチとする。さらに11Ｆトレンチの南側に追加工事が行われたので、12Ｆトレンチとした。

（1）10Ｆトレンチ

本調査区は、10Ｅトレンチの南側に道路と挟んで位置する。本調査区では遺構面を３面確認した。現地表面の下層では、先ず攪乱盛土層が厚く堆積し、その下位には旧耕作土層と床土層が堆積する。この旧耕作土層と床土層を除去して第１面とする。さらにこの層の下位には２枚の遺物包含層が在る。上層の遺物包含層１と、下層の遺物包含層２である。遺物包含層１の下面を第２面とし、遺物包含層２の下面を第３面とした。第３面は地山面で、段丘層である。土層観察によれば以上のように層を分ける事ができるが、特に第２面と第３面は、調査区の北半部では明瞭であるが、中央部から南半部へ至るにつれて不明瞭になる。この事は地形的な事が反映されていると考えられる。第２面と第３面は明瞭に区別出来ると先述したが、第３面の上に介在する包含層が薄ければ、第２面の遺構が第３面にまで及び、第２面と第３面の遺構の区別が難しくなる。その際には遺構の埋土によって区別しているが、総てに亘って出来ていない。第２面の遺構と第３面の遺構を重ね合わせて見ると、重なり合うものがあるかも知れない。この様な状況も遺構の立地状況と、地形の状況を反映されていると考えられ、遺構の複雑さを物語っている。

Ａ．第１面

第１面の遺構としては、ピット・井戸

写真72　10Ｆ・11Ｆトレンチ全景（南から）

畦畔・鋤溝を確認している。

井戸

調査区の北半部と南半部に位置し、北半部では3基（井戸6・7・8）を、また南半部では1基（井戸3）を確認した。井戸6は北端に位置し、底部のみ残存する。素掘りの井戸で、径は0.9mを測る。井戸7・8は調査区の西側に位置し並列する。井戸7は井戸8を壊して造られており、掘り方径は推定1.5mを測る。井戸枠はコンクリート製である。径0.6mを測る。井戸8も井戸枠がコンクリート製である。掘り方径は1～1.5mで、井戸枠径は0.65mである。

井戸3は、南半部の西側に位置する素掘り井戸である。肩部（上口）の径が3mを測り、0.3m下がった箇所からさらに径1.2mで掘り窪めている。底部までは調査できなかった。

写真73　北半部第2面全景（南から）

畦畔

X－159555ラインで東西方向の畦畔を確認した。その畦畔では径が0.5mのピットを確認している。この畦畔は坪境の畦畔と思われる。この畦畔よりさらに北側で、東西方向小畦畔を確認した。

B．第2面

遺構面は北端で標高T．P．+33.19mを、中央部で+33.6mを、南端で+33.83mを測る。北半部は第1面、本遺構面ともに大きく下がり、中央部から南半部へは徐々に高くなり、傾斜する。東西方向も西側が若干高く成る。

遺構としては、多数の大小のピットや、井戸・土坑・溝を検出した。

ピット

ピットは調査区全体に広がっているが、特に北半部か

ら中央部北半にかけて密集している。多数のピットには切り合っているものもあり、時期的な差が窺われる。ピットは第5調査区の井戸6の北側に建つ建物4・5・7と一連のものであるが、細かい分析は後日に委ねることとし、遺構もその一部のみに限って記述したい。

P395（又は396）・382・376・356は主軸方向をほぼ南北方向におく。いずれも柱根の痕跡を確認した。またP382では根石が残る。全長は6.1mを測り、ピット間の距離は2.2m、1.85m、2.05mを測る。ピットの平面形は円形乃至は隅丸方形である。ピットの大きさは、0.35～0.4mである。根石は幅0.15m、厚さ0.08mを測る。またP356では、ピットの底部に径0.09m、深さ0.06mの柱根痕跡が残る。

P394・386・375・459は先のピットと並行して並び、主軸方向もほぼ同一方向である。全長は6.4mを測る。各ピット間の距離は1.9m、2.1m、2.4mである。ピットの大きさは径約0.4mである。P394以外は柱根の痕跡を確認した。柱根は0.1～0.15mを測る。

写真74　中央部・南半部第2面全景（北から）

P397・383・378は先の2列のピット列と並行し、主軸方向も同一である。全長4.4mを測り、ピット間の距離は2.1m、2.3mを測る。平面形は円形を呈し、先のピット列よりも大きさは小さく、径が0.25～0.3mを測る。柱根痕跡の径は、0.07～0.15mである。このピット列を中心にして90°を振ると、P401が存在する。

P401・397は、ピット間の距離が1.8mを測る。主軸はほぼ東西方向であるが、やや東北東－西南西方向に向ける。柱根痕跡は確認している。

P328・336・341は、溝21の南側に位置する。周辺には大型ピットが多く存在し、本ピット列

の中にも、先のピット群よりも大きいものがある。全長は3.9mを測り、各ピット間の距離は1.9m、2mを測る。ピットは、平面形が隅丸方形を呈する。ピットの大きさは、P328・336が、約0.5×0.4mを測り、P341は一辺が0.3mを測る。深さは0.15～0.2mである。ピットのいずれからも柱根痕跡を確認した。柱根痕跡径は0.09～0.2mである。ピットの底部では痕跡が明瞭に残る。

P362・349・339・330・319は、井戸5や土坑19の東側に隣接して位置する。全長は8.9mを測り、各ピット間の距離は2.1m、2m、2.2m、2.6mを測る。ピット列の主軸は北北西－南南東方向におく。ピットの平面形は不整な隅丸方形を呈し、大きさは、P349を除き一辺が0.7～0.8mを測る。P349は、一辺が0.45mである。深さはP349が0.15mを、P362・319が0.25mを、P339・330が0.35～0.4mを測る。いずれのピットからも柱根の痕跡を確認した。柱根痕跡は、径が0.15～0.25mを測り、P349・339が小さく、P319が大きい。P330の底部では柱根の痕跡が明瞭に残る。埋土では、P339・330の柱根痕跡で炭化物を確認した。遺物は、P319で白磁碗と土師器皿が出土しており、また他のピットでは、土師器などの土器細片が出土している。

写真75　南半部第2面全景（南から）

P337・329・318・455・300は、井戸5から溝19の東に隣接して位置する。主軸は南北方向におく。全長は7mを測り、各ピット間の距離は1.7m、1.6m、2m、1.7mを測る。ピットの平面形は、ほぼ隅丸方形を呈し、大きさが0.6mを測る。いずれのピットも柱根の痕跡を確認している。柱根痕跡の大きさは、径が0.2～0.3mを測り、掘り方底部に柱根痕跡を明瞭に残す。底部から、約0.1～0.15m下がる。P337・300の柱根痕跡の埋土には炭化物が含まれていた。遺物としては、P337より黒色土器碗が出土しているほか、他のピットにおいても土師器等の土器細片が出土している。

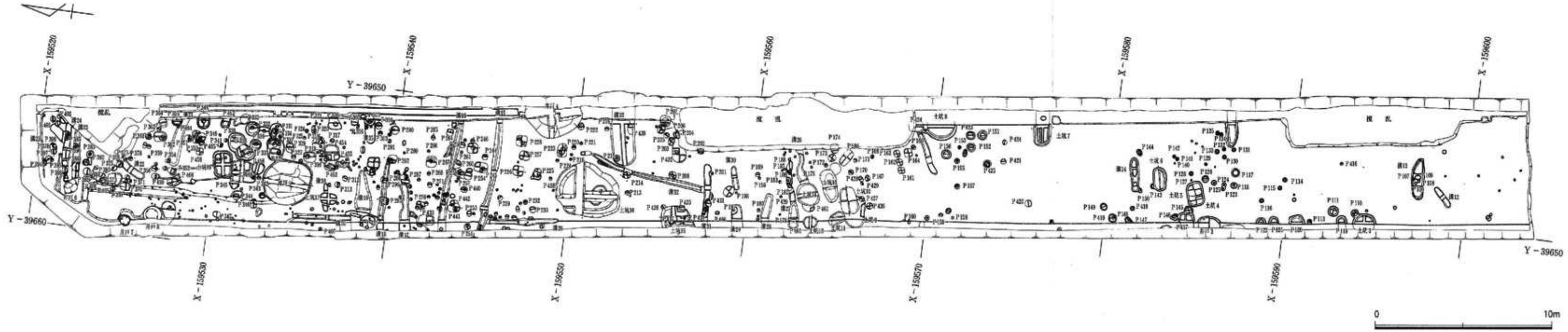


図54　10Ｆトレンチ第２面平面図

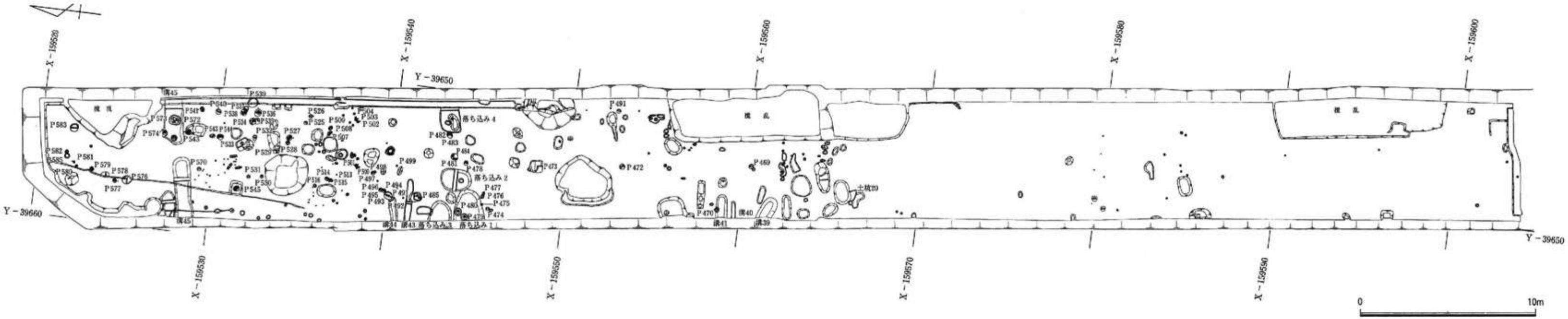


図55　10Ｆトレンチ第３面平面図

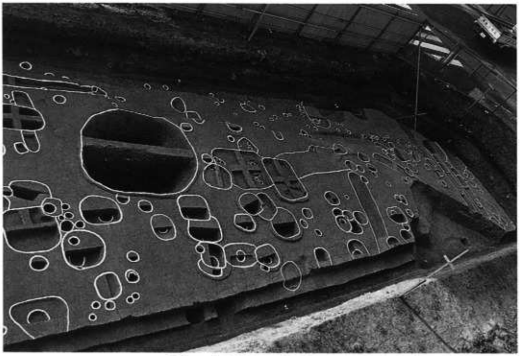


写真76　北半部第２面全景（東から）

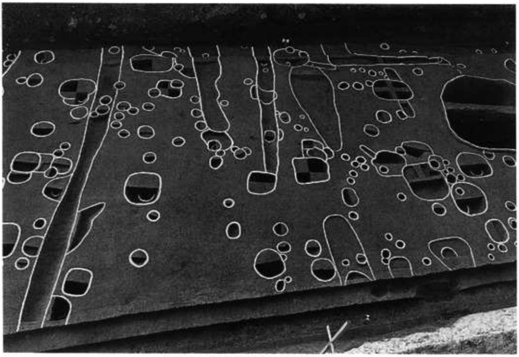


写真77　北半部第２面全景（東から）

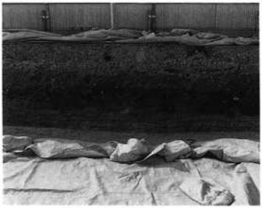


写真78　土層断面（東から）

写真79　土層断面（東から）

写真80　土層断面（東から）

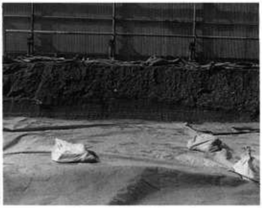


写真81　土層断面（東から）

これら南北方向の主軸を有するピット列に対して、90°を振るピットは、P362・364がある。P362・364は、ピット間の距離が0.8mを測る。主軸は東西方向におく。ピットは平面形が隅丸方形である。P364は一辺0.6mと小さいが、柱根痕跡は認められ、0.2mを測る。遺物は土器細片が出土している。

P349・348は、P362・364の南側に2m離れて位置し、主軸方向は同一方向である。ピット間の距離は1mを測る。P348は全体を検出できなかったが、大きさが0.9×0.6mを測るものと推測される。深さは0.25mである。P348では柱根痕跡を確認した。柱根痕跡の径は、0.2～0.25mを測る。遺物は須恵器や土師器が出土している。

P337・333は主軸を東西方向におく。ピット間の距離は、1.4mを測る。P333は平面形が不整な隅丸方形を呈する。大きさは一辺が約0.5mを測り、深さは0.15mを測る。柱根痕跡径は0.15mである。

P329・331は、P337・333と同一方向に主軸をおく。ピット間の距離は、1.15mを測る。平面形は隅丸方形を呈する。柱根痕跡径は0.25mである。ピットの底部は更に0.15m下がり、柱根痕跡が明瞭に残る。

写真82　P365遺物出土状況（西から）

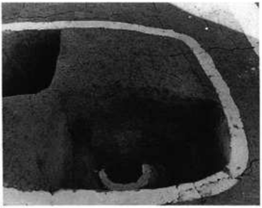


写真83　P245土層断面（西から）

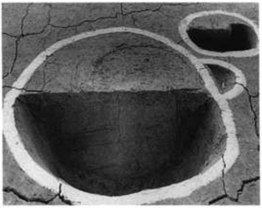


写真84　P290土層断面（東から）

P318・320は、P329・331の南側に約1.5m離れて位置し、主軸は東西方向におく。平面形は隅丸長方形である。大きさは0.45×0.35mを測り、深さは0.1mである。

P300・304は、P318・320の南側に位置し、主軸は東西方向におく。ピットの上部は削平されているが、柱根痕跡を確認できた。なおP300では、柱の抜き取りの痕跡が認められた。

先のピット群の南に於いても、ピットの並ぶものが幾つかあり、建物が想定されるものである。P290・292・296・297は、溝19・35の南側に位置する。ピット列の主軸方向は、東西方向である。全長は4mを測り、各ピット間の距離は1.55m、1.3m、1.15mを測る。ピットの平面形は不整な隅丸方形を呈する。大きさは一辺が0.5mを測るが、P296のみが0.25mと小さいものである。深さは0.15〜0.35mを測り、P290が深い。いずれも柱根痕跡を確認した。柱根痕跡の径は0.1〜0.2mを測る。掘り方底部では、柱根痕跡が明瞭に認められ、P292のように0.1mも下がるものがある。またP296の埋土では炭化物を検出しており、遺物ではP297を除いて土器が出土している。

P265・267・(271)・276は、P290・292・296・297の南側に2m離れて位置する。P271は、本ピット列の軸線上にのらず、若干はずれる。ピットの平面形は隅丸方形を呈する。大きさはP267・276が大きく、一辺が0.5〜0.6mを測る。深さは0.25〜0.3mを測る。P265が他のものに比して小さく浅いのは、削平された為と考えられる。いずれのピットにおいても柱根の痕跡を確認した。柱根痕跡の径は、0.1〜0.3mを測る。P276の埋土には炭化物が混入する。

P246・257（254）・440・441は、P265・267・(271)・276の南側2m離れて位置する。主軸はやや東に向け、西北西－東南東方向におく。全長は3.6mを測り、ピット間の距離は1.65mを、

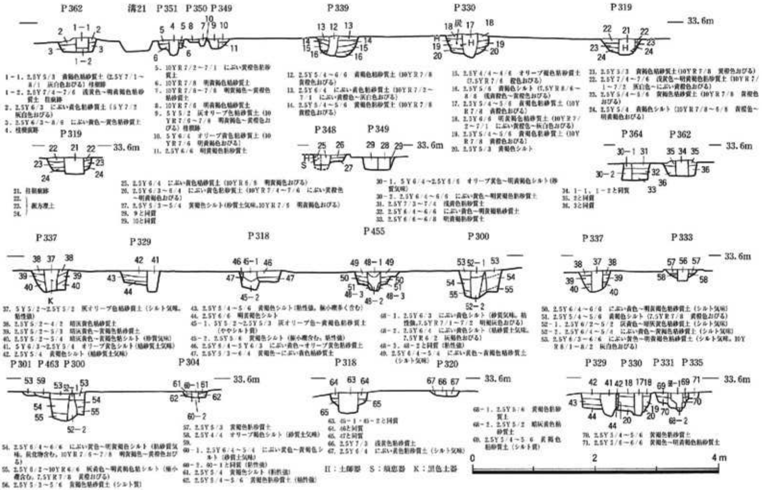
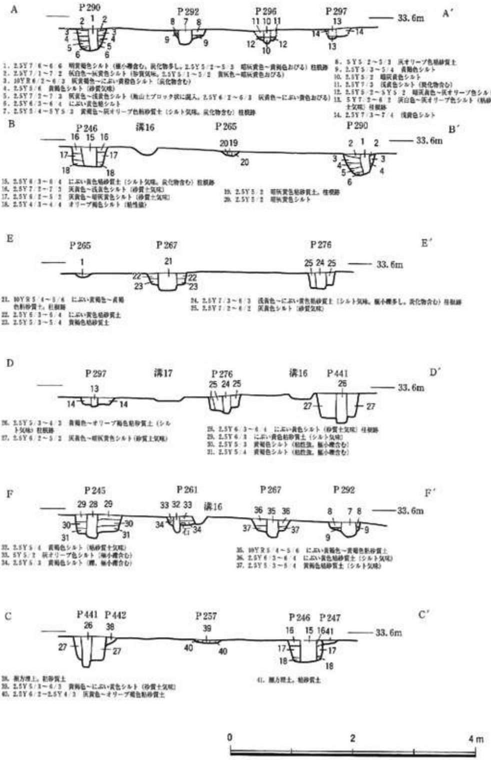


図56　第2面ピット断面図



1. 2.5Y7/6～6/6　明黄褐色シルト（極小礫含む、炭化物多し。2.5Y5/2～5/3　暗灰黄色～黄褐色おびる）柱根跡
2. 2.5Y7/1～7/2　灰白色～灰黄色シルト（砂質気味。2.5Y5/1～5/2　黄灰色～暗灰黄色おびる）
3. 10YR6/2～6/3　灰黄褐色～にぶい黄橙色シルト（炭化物含む）
4. 2.5Y5/6　黄褐色シルト（砂質気味）
5. 2.5Y7/2～7/3　灰黄色～浅黄色シルト（地山土ブロック状に混入。2.5Y6/2～6/3　灰黄色～にぶい黄色おびる）
6. 2.5Y6/3～6/4　にぶい黄色粘シルト
7. 2.5Y5/4～5Y5/3　黄褐色～灰オリーブ色粘砂質土（シルト気味。炭化物含む）柱根跡
8. 5Y5/2～5/3　灰オリーブ色粘砂質土
9. 2.5Y5/3～5/4　黄褐色シルト
10. 2.5Y5/2　暗灰黄色シルト
11. 2.5Y7/3　浅黄色シルト（炭化物含む）
12. 2.5Y5/2～5Y5/2　暗灰黄色～灰オリーブ色シルト
13. 5Y7/2～6/2　灰白色～灰オリーブ色シルト（粘砂質土気味）柱根跡
14. 2.5Y7/3～7/4　浅黄色シルト

15. 2.5Y6/3～6/4　にぶい黄色粘砂質土（シルト気味、炭化物含む）柱根跡
16. 2.5Y7/2～7/3　灰黄色～浅黄色シルト（砂質土気味）
17. 2.5Y6/2～5/2　灰黄色～暗灰黄色シルト（砂質土気味）
18. 2.5Y4/3～4/4　オリーブ褐色シルト（粘性強）
19. 2.5Y5/2　暗灰黄色粘砂質土、柱根跡
20. 2.5Y5/2　暗灰黄色シルト

21. 10YR5/4～5/6　にぶい黄褐色～黄褐色粘砂質土、柱根跡
22. 2.5Y6/3～6/4　にぶい黄色粘砂質土
23. 2.5Y5/3～5/4　黄褐色粘砂質土
24. 2.5Y7/3～6/3　浅黄色～にぶい黄色粘砂質土（シルト気味、極小礫多し、炭化物含む）柱根跡
25. 2.5Y7/2～6/2　灰黄色シルト（砂質気味）

26. 2.5Y5/3～4/3　黄褐色～オリーブ褐色粘砂質土（シルト気味）柱根跡
27. 2.5Y6/2～5/2　灰黄色～暗灰黄色シルト（砂質土気味）
28. 2.5Y6/3～6/4　にぶい黄色シルト（砂質土気味）柱根跡
29. 2.5Y6/3　にぶい黄色粘砂質土（シルト気味）
30. 2.5Y5/3　黄褐色シルト（粘性強、極小礫含む）
31. 2.5Y5/4　黄褐色シルト（粘性強、極小礫含む）

32. 2.5Y5/4　黄褐色シルト（粘砂質土気味）
33. 5Y5/2　灰オリーブ色シルト（極小礫含む）
34. 2.5Y5/3　黄褐色シルト（礫、極小礫含む）
35. 10YR5/4～5/6　にぶい黄褐色～黄褐色粘砂質土
36. 2.5Y6/3～6/4　にぶい黄色粘砂質土（シルト気味）
37. 2.5Y5/3～5/4　黄褐色粘砂質土（シルト気味）

38. 掘方埋土、粘砂質土
39. 2.5Y5/3～4/3　黄褐色～にぶい黄色シルト（砂質土気味）
40. 2.5Y6/2～2.5Y4/3　灰黄色～オリーブ褐色粘砂質土
41. 掘方埋土、粘砂質土

図57　第２面ピット断面図

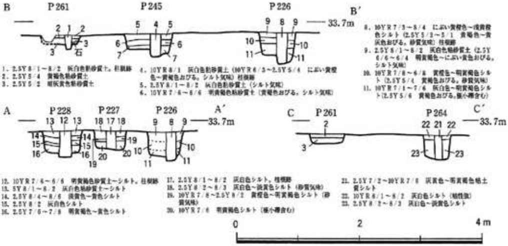


図58　第２面ピット断面図

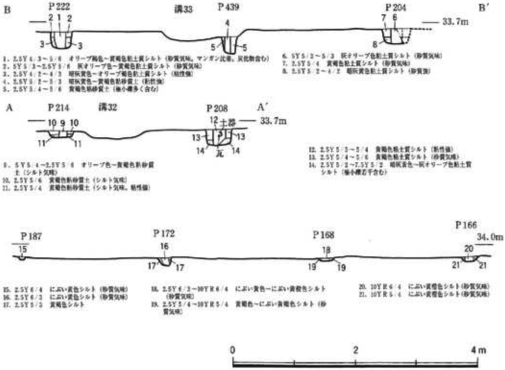


図59　第２面ピット断面図

0.75m、1.2mを測る。軸線上ではP257がのるが、P254の方が深さも0.1mと深いので、P254の可能性もある。またP440は軸線から若干ずれるが、先のP296・271とは南北に直線上に並ぶ。P246・441は、大きさ・深さともに他のものより優っている。P246の柱根痕跡径は約0.3mである。P441はピットの底部に柱根痕跡が明瞭に残る。

これら東西のピット列に対して、軸角がほぼ90°にとるピット列が存在し、P290・265・246、

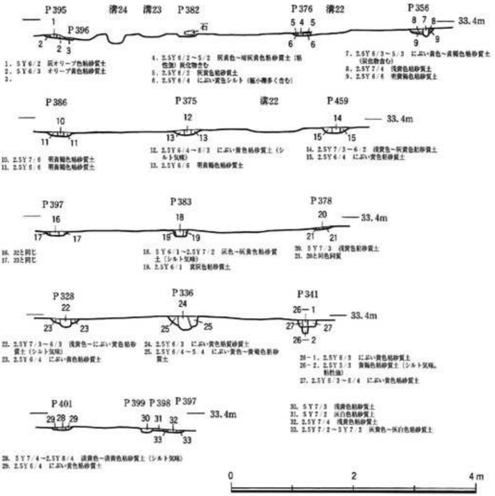


図60　第２面ピット断面図

P292・267、P296・271・440、P297・276・441である。P292・267は、軸線を南へ延ばすとP245・226・225のピットに至る。P267と245は、ピット間の距離が３mを測り、P292・267が2.2mであるのに対して、少し距離が開き過ぎである。P245・226・225では全長が3.2mを測り、ピット間は２m、1.2mを測る。なおP267とP245の間にP261が位置するが、その距離は1.3～1.5mである。いずれにも柱根痕跡を確認しており、ピットの底部では明確に痕跡が残る。

P290・265・246のピット列の軸線を南へ延長すると、P227に至る。P246との距離は2.9mを測る。P227では柱根痕跡を確認した。

P226・228は、P245・226・225のピット列に対して、軸角が90°をとる。ピット間の距離は1.7mを測る。P228は平面形が隅丸方形を呈する。柱根痕跡は明瞭に残る。

調査区の中央部に於ても幾つか並ぶものがある。P222・439・204である。主軸は南北方向におき、全長が5.5mを、ピット間の距離を2.75mを測る。いずれにも柱根痕跡を確認した。

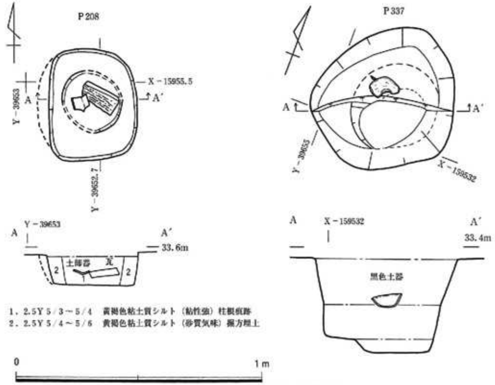


図61　第２面Ｐ208・337平面・断面図

写真85　Ｐ208遺物出土状況（南から）

写真86　Ｐ337遺物出土状況（南から）

Ｐ222・439・204の西側に、北北西－南南東方向に主軸をおくＰ214・208・201・196のピット列が存在する。全長は7.3mを測り、ピット間の距離は2.5m、2.3m、2.5mを測る。Ｐ201では根石を確認している。またＰ208では土師器と共に瓦が出土している。

Ｐ187(または185)・172・168・166は、土坑10・13・14の東側に位置する。主軸方向は先のピットとほぼ同じ方向であるが、やや西へ振り、北西－南東方向においている。全長は7.3mを測り、ピット間の距離が2.3m、2.6m、2.4mを測る。Ｐ187を除いて柱根痕跡を確認した。

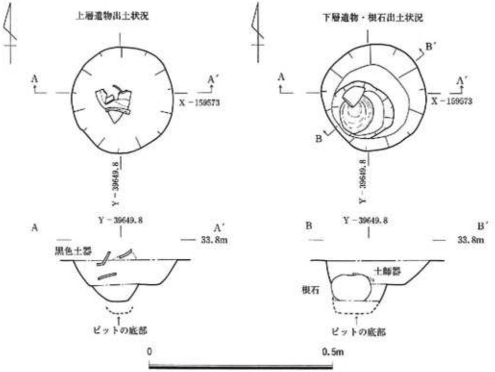


図62　第２面Ｐ425平面・断面図（左：上層、右：下層遺物出土状況図）

写真87　Ｐ425上層遺物出土状況（北から）

写真88　Ｐ425下層遺物出土状況（東から）

溝28の周辺においても、並びそうなものが幾つかある。Ｐ425・157・159である。特にＰ425からは瓦器碗・黒色土器碗・土師器の他に、ピット以前の時代の石鏃や叩き石を転用した根石が出土している。Ｐ170・162・156のピット列では、Ｐ170で柱根痕跡を確認した。

調査区の南半部においても、並びそうなピットが幾つか存在する。とくに土坑４・５・６とその西側である。また南端部のＰ106・108では土師器皿が、Ｐ109では根石が出土している。

井戸

井戸は、調査区の北半部から中央部にかけて３基検出した。井戸４・５・土坑16である。土坑

16は調査当初のままの登録番号で呼称する。井戸の立地を全体的に見ると、ピットと土坑が多数密集している箇所に於て見られる。

井戸4は土坑16の東側に位置し、大半が調査区外である。第5調査区では、井戸6と呼称された素掘りの井戸である。現況では径が3mを、第5調査区のものと繋ぐと約4mを測る。平面形は不整な円形であるが、第5調査区の調査部分を合わせると、長円形に成る。本調査区では、深さは0.77mを測る。断面形は擂鉢状を呈する。井戸の中心部分は第5調査区に在り、本調査区では壁面近くの段上になる箇所を調査した。埋土は、粘性の砂質土で礫が多量に混じり、地山の土がブロック状に混入する。遺物としては、土器が若干出土しているが、第5調査区では「東寺」と墨書された土師器の鉢や甕、杯が3点出土しており、平安時代前期に位置付けられている。

井戸5は調査区の北半部に位置し、周辺にはピット列や土坑が存在する。地形的には北端部の低い箇所から高くなる傾斜変換点に立地している。平面形はほぼ円形を成し、断面形は擂鉢状を

写真89　P382根石出土状況（南から）

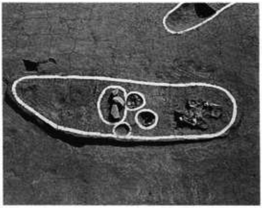


写真90　溝13、ピット遺物出土状況（東から）

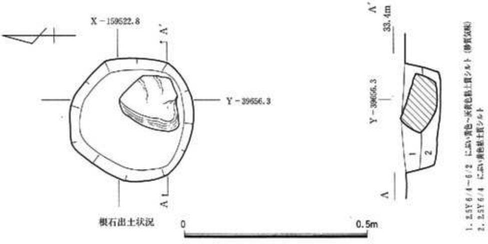


図63　第2面P382平面・断面図

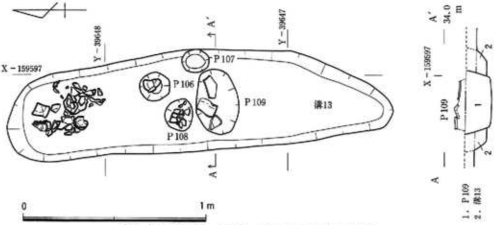


図64　第２面溝13、Ｐ106・108・109遺物出土状況図

写真91　溝13遺物出土状況（東から）

写真92　ピット遺物出土状況（東から）

呈する。壁面は底部近くで段状に成す。平面は肩部（上口）径が2.55mを、底部径は0.5mを測る。深さは0.7mを測る。断面観察により２層の粘土を確認した。中間の箇所と底部である。埋土は全体的に粘性の砂質土で、礫が多く含まれており、地山の土がブロック状に混入する。遺物は、瓦質土器の甕等が出土している。

土坑16は溝33の西側に隣接し、井戸４とは南西側に1.5m離れて位置する。土坑は傾斜変換から平坦になった箇所に立地している。平面形は不整な長円形を呈する。壁面は段状に成形される。底部は概ね平坦であるが、南側で小判形に浅く掘り窪められた落ち込み状の遺構が存在する。大きさは肩部（上口）の径が3.6×3.1mを測り、底部径は2.8×2.3mを測る。深さは0.36mである。落ち込み状の遺構は、大きさが1.2×0.8m、深さが0.1mを測る。主軸方向は、北西－南東向におく。埋土は大きく３層に分けられ、粘砂質土、粘土質シルト、シルト質粘土である。中層では多量の炭化物を確認した。遺物は、須恵器蓋・杯身が出土しており、中村編年のⅢ型式３段階～Ⅳ形式１段階に相当すると考えられる。

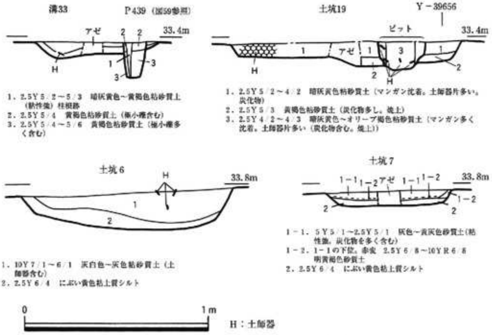


図65　第２面溝33、土坑６・７・19断面図

土坑

土坑として登録したのが16基あるが、そのうち土坑16は井戸としての可能性が大なので、井戸の項の中で述べた。土坑を外観すると、中央部から南半部にかけて多く見られる。また平面形では円形のもの、隅丸方形・長方形のもの、不整な長円形が見られる。

土坑18は、井戸５に隣接して位置し、土坑19とP456によって一部が切られている。平面形は隅丸方形を呈する。大きさ1.4×1.3mを測り、深さは0.14mを測る。埋土は粘性の砂質土（マンガン斑沈着）である。土坑の底部には径0.05～0.1mのピットが見られるが、中には土坑よりも後の時期と考えあられる。

土坑19は、土坑18の北側に位置し、土坑18の一部を切っている。平面形は隅丸長方形を呈する。大きさは1.3×0.9mを測り、深さは0.14mを測る。底部は西側が0.05～0.06mほど下がる。主軸方向は東北東－西南西方向におく。埋土は粘性の砂質土で、炭化物・焼土塊が含まれる。壁面は若干赤変している。遺物は土師器片が多く出土しているが、石鏃も１点混入していた。

土坑17は、井戸５の南側に隣接して位置する。平面形が隅丸長方形または長円形を呈する。大きさは0.95×0.6mを測り、深さは約0.1mを測る。主軸は南北方向におく。

土坑15は、土坑16の南側に位置する。土坑は調査区外へ延び、全容は不明である。現存の大きさは1.8×1.2m以上で、深さは0.26～0.3mを測る。主軸方向は東西方向と推測される。なお底部では、更に0.05mほど掘り窪められている。埋土中には、炭化物が多く認められるが、掘り窪みの箇所では特に顕著であった。遺物としては、土師器甕・鉢、須恵器杯身が出土している。